OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜新刊紹介＞島津忠夫著「能と連歌』
Author(s)	伊藤, 茂
Citation	語文. 1990, 55, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

島津忠夫著『能と連歌』

伊藤茂

島津先生が連歌研究者として第一人者であることはいうまでもない。一方能楽についても、本分とはされなかったようだが、けっして傍観者ではすごされず、むしろ積極的に意見を述べられ、特色ある視点を提示されてきた。それはたんに連歌と能楽が同時代のジャンルであるからではなく、それら二つのジャンルの近接ぶりを室町文化の芸能的性格という問題において捉えようという明快な目的のもとでなされていたことである。

近著『能と連歌』は、その昭和34年「『田村』の考察をめぐっての試論」から最近の論考までの全行程をまとめ、私たちに見せてくれる。上梓にいたる経緯とその意図は、「あとがき」に「はじめは能に関する論考を集めて一書を編む積もりであったが、連歌との関わりで論じたものも多く、私としてはやはりそこに特色があることを思って、連歌について書いたもののうち、特に芸能と関わりのあるものをもここに集めることにした」とあるとおりである。

細別すれば30編の論考が集められていることになるが、著者はそれを16の章題のもとに再編する。なおそれを私意に4つの主題に分けて紹介したい。

第一（1章～3章）は連歌と能楽の教養圏の問題である。

すでに片桐洋一氏、伊藤正義氏らによって『古今集』『伊勢物語』などの古注釈と能本との密接な関連が指摘され、能本解釈において飛躍的な進展を見たが、筆者はそれを能楽に携わるものたちの教養の問題としてとらえ、その教養の一つとして連歌があったことを具体的な作品解釈で示す。

またその教養の交流は従来いわれてきた注釈書の共有にとどまらず、会所・寄合という劇場になぞらえられるような場への参加によっても保証されていた。連歌は茶・花・香の場と近接し、集う人びとはことばであれ、美的造型であれ、身体運動であれ、同じ場で表現を楽しみまた享受する。いわば芸能の基本的な性格を共有していたのであり、良基の「不知記」をあげるまでもなく、そのような場に出入りした人物たちのひとりとして芸能者があり、かれらとの交流も当然あっただろう。それは芸能者の側からも同様である。

第二（4章～9章）は能本の作品解釈である。

昨今の能楽研究は一時代前とはまったく様相をちがえ、しばらく

脇見しているとすでに捉えがたいところまで進んでいる。とくに、作品研究においてそうである。

著者の作品解釈の多くは求めに応じられたもので作品の選択についてはやや雑然とし、原稿量もやや窮屈な感があるため意図が必ずしも生かされたとはいえないだろうが、いずれもその解釈の水準は高い。紙数の多くは典拠の解明、紹介にさかれているが、能本の典拠が和歌の注釈から口承文芸にまで及ぶ、「地下」の文化をその範囲としなければならない現在、著者の連歌を中心にしたオールラウンドな博識がいかんなく発揮されている。

とくに著者の関心は能本作者の特定にも向けられており、その結論はやや慎重な口ぶりながらも一歩踏み込んだ形で述べられている。それらは能作技法の分析的解明による帰納的なものではないが、それだけに能本の文芸性に対する直観的評価を支えとした自信が感じとれた。

第三（10章～11章）は資料紹介を中心にして、狂言について述べられたもの。狂言に関しては、ここでの短い論考よりも能本解釈中の間狂言に対する考察が示唆に富むだろう。

第四（12章～16章）の問題は連歌の芸能性について論じたものである。

連歌が文芸性を高め、和歌と同等の地位を得るようになっていくにしても、その基本的な性格は座という場で表現されるものであることに違いない。座が宴や祭と近似した性格をもち、そこで催される連歌が芸能性を持つことは、林屋辰三郎氏の論以来、もはや常識であろう。本著では今井祇園社、杭全神社の紹介を中心にしているが、まさしく芸能として生き続けている連歌の報告となって興味深い。連歌の絵画資料紹介とともに、連歌を芸能として扱おうとする本著の関心が一貫しているのである。

芸能は表現の場に立ち合えたものだけが享受できるものである。原作品はその瞬間に消滅するのであって、だから残されたことばは形骸にすぎない。だが、連歌はもちろん能楽も、そのことばで一つの世界を創りあげようとする努力はある。それを「文芸性」といっていい。ただ、そのような「文芸性」は芸能的な制約、すなわち「読者」ではなく「観客」を想定しなければならない点で和歌や物語とは同一には論じられない。異質な創作過程があったのである。

ことばが芸能の場に向けて発せられるとき、ことばはどう生かされるのか、またどう制約されるのか。文芸と芸能の接点はいかにも微妙であり、私はそれを解析する方法を得たいと思いつつ果たせないでいるが、『能と連歌』もまた、そこへのこだわりにつながっているように見受けられたのである。

その意味で、芸能という捉えがたいものを気にかけているものとしての親近感が、あるいは島津先生が芸能研究者としても一級の視点をもっておられることへの信頼感が、読後たしかに確認することができた。私が『能と連歌』のよりよい読者であるかはさておき、縁はあったと感じている。

なお『能と連歌』は和泉選書49として和泉書院から刊行。一九九〇年三月十五日初版。二八一頁。定価三〇〇〇円である。

――神戸学院大学助教授――